

LESOTHO:

KINGDOM IN THE SKY

・内田 勤

「空の王国」と呼ばれるレソト王国は、雲一つ無いダーク・ブルーの空が年間30日以上も続き、原始時代を思わせるテーブル・マウンテンや3000メートル近い険しいドラケンズブルグ山脈のあるアフリカの国だ。首都マセルは標高1500メートル、人口20万、毎年開催される「アフリカの屋根」ラリーの出発点となっている。カラフルな毛布をコート代わりに羽織り、麦藁笠をかぶって、馬に乗る黒人の姿はアフリカ中捜してもここレソトでしか見られない。オレンジ川の源流を持つ山岳地帯では水資源にも恵まれ、蕎ぶきのとんがり屋根を持つ村が「アロエの木」に囲まれて点在している。

ベリア・プラトーは高さ平均約50メートル、面積およそ500平方キロメートルに及ぶテーブル・マウンテンで、レソト王国の首都マセルの中心から約3キロに位置している。その端に立ち、辺りを見回すと平らな原

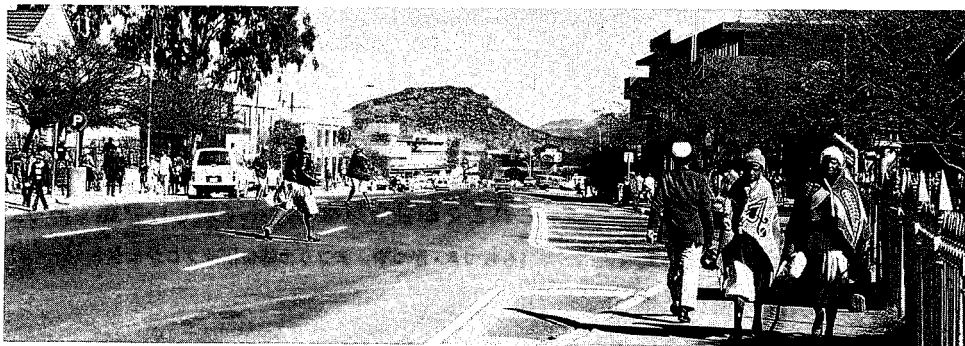
野と点在する別のテーブル・マウンテン群や、遙か彼方に壁の様に並ぶ山脈が見え、眼下にはマセルの街がひろがる。小さい川が街の向こうに走っており、南アフリカ共和国との国境線となっている。南アフリカ側の大地には緑の牧草や畑が一面に広がり、レソト側の荒れた土地と対照をなしている。空気が乾燥しており、又快晴のために視界は地平線まで届く。見渡す限りの広大な南アフリカ側の土地が数人の地主により所有されていると思うと、そこを開拓した白人植民者の持っていたエネルギーに驚かされると同時に、彼等の欲望の深さに呆れる思いが起こる。

17世紀以来ボーア人はバソト族と衝突を繰返し、かれらを不毛の山岳地帯に追込んだ。イギリスがバソト族を擁護したため南アフリカの一部に成らずにすみ、バソト族は1966年の独立までバストランドというイギリス保護領として命脈を保ち続けた。

アフリカ大陸を分断している国境線に出会うたび、西欧帝国主義の残した傷跡がいかに深いものかを思い知らされる。

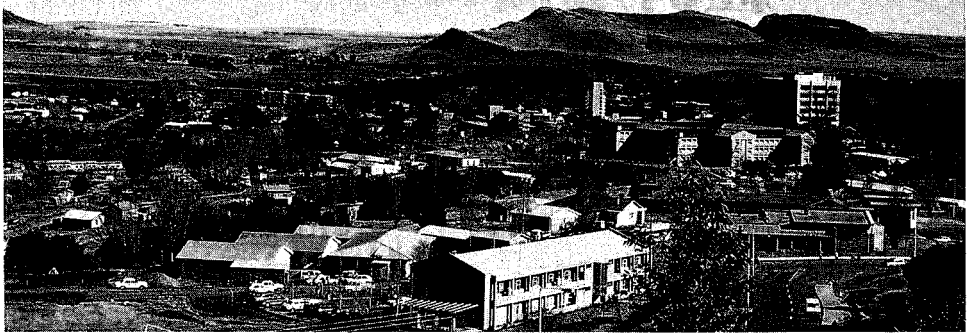
近代文明から隔絶している山麓の村は平和で、時間がゆっくりとながれている。若い働き盛りの男達は南アフリカに出稼ぎに行っているため、やたらと年寄りや子供が目につく。灌漑設備のない村での農業は難しく、牧畜が主体だ。だが家畜の数の割には牧草地は痩せていて、山の斜面など狭い土地しかない。とうもろこしが主要農産品となっているが、雨水に頼る農業で収穫高も少ない。食糧需要の約半分を先進国からの食糧援助により満たされているからだろうか、毎年耕作面積が減少している。さらに追討ちをかけるように表土流出が貴重な耕地をさらに減少させている。

この国に来て最初に気付くのは樹木が少ないことだ。首都にはイギリス時代に植えられた街路樹が結構あるが、一歩街を出ると木は殆ど無い。FAOの植林エキスパートによると、苗木を植えて少々手をかければ良く育つ気候なのだそう。今から1～2万年前にはうっそうたる森林が大地



マセル市の中心街

マセル市を望む。手前の建物に筆者の勤務したUNDPが入っている。



を覆っていたといわれている。日本に住む人にとって、樹木の無い山脈は殺伐としたものにみえるが、レソトに住む者にとってそれが当り前の風景なのだろう。樹木の保護を受けない大地に生じる表土流出は凄まじい。

レソトから北東に約500キロ離れた所にスワジランド国がある。スワジランドもレソトと同じほどの面積と歴史を持っているが、スワジランドのほうが豊かな自然に恵まれている。この国もイギリスの保護領であったが、ここではイギリス時代から大規模な植林が行なわれていたため、首都ムババネを取巻く山岳の山々は樹木に覆われている。樹木が空気中の水蒸気を保つために、ムババネの空気には心地好い湿り気があり、当地を快適な観光地にしている。もしこの様な穏やかで優しい自然がレソトに与えられているなら、レソトの人々の生活はもっと豊かなものになっていただろう。

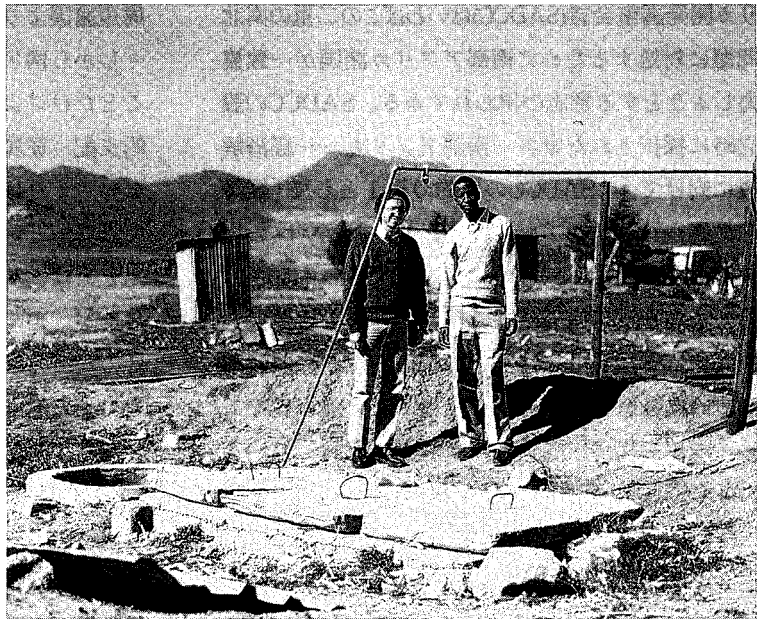
レソトの自立を可能にするには、隣国南アフリカが今までの態度を変え、周辺黒人国家との関係改善を行なうことが必要条件となっている。南アフリカの炭鉱労働力供給源とな

っている現在の立場を変えるには、国内に十分な雇用創出能力がなければならぬが、国内の乏しい天然資源と限られた市場へのアクセスといった制約条件のためにそれも難しい。

国連開発計画はレソトに事務所を置き技術援助を行なっているが、あまり効果が上がっていない。その最大の原因は、自立するのに必要な国内の経済的基盤や自然環境が整っていない国でありながら、その点に手

をふれずに技術援助を実施しなければならない事に求められよう。これは技術援助のみを通じ開発に取り組む事から生じる限界であるともいえるだろう。レソトの置かれた政治的、地理的な特殊環境を考慮するとき、この国では開発よりも環境保護のほうが重大な問題となっているような気がする。

(うちだ・つとむ/海外経済協力基金職員)



モハレズ・ホークのバイオガス・タンク前で筆者